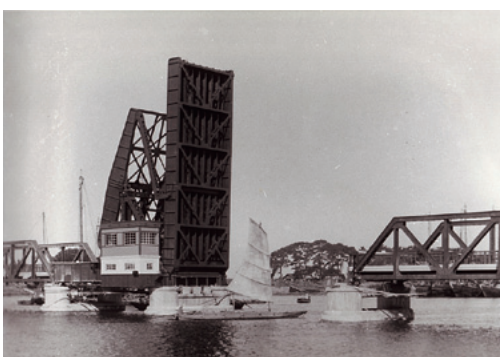




井戸の釣瓶の仕組みで、開閉の作用を軽減させていることから、稼働に使う動力は7.5馬力の電気モーター2台のみ。停電時には手動でも動かすことができる。平成10年には登録有形文化財に登録された

昭和10年頃の長浜大橋



昭和8年からおよそ2年の工期と29万円を費やしてつくられた長浜大橋

そして、伊予灘へ。

五郎河原に 咲き誇るのは 住民の皆さんの愛

平成3年、大洲市五郎の15人が立ち上げた「五郎花を愛する会」は、肱川の河川敷に、春は菜の花、秋はコスモスを咲かせようという地域発の里おこし運動を始めた。「さして宣伝もしてなかつ



「五郎花を愛する会」の藤田会長（右）と三瀬良暁副会長

たのですが、年を追う毎に足を運んで下さる方が増え、今では3月に菜の花まつりを開催しています」と話すのは藤田貞雄会長。藤田さんらが整備している花畑は、堤防沿いから眺めることができるため、花を目にした人が口コミで評判を広めたのであろうか。その後、大洲農業高校の生徒が整備した菜の花、ひまわり、コスモス畑もでき、五郎河原は春、夏、秋のそれぞれ楽しめる花の名所となった。藤田さんら住民たちの愛が、大きく開花したわけだ。

週に1回、赤橋が いい仕事しています

神秘的な自然現象に出逢える大洲。晩秋から冬にかけて、大洲盆地にはしばしば霧が発生する。これが風に乗って河口へと下っていくと、河口付近で霧をともなった強風「肱川あらし」が発生する。肱川あらしは、時には伊予灘の沖合まで達することもある。「肱川

あらし」が発生した時、河口を見下ろす標高820メートルの金山出石寺からは、美しい雲海が一望できる。
肱川河口に架かる長浜大橋（通称赤橋）は、昭和10年に県道橋として建設された。全長226メートル、幅5.5メートルの橋の中央部分が跳ね上がる仕組みになっており、現役の道路可動橋（バスキール式鉄鋼開閉橋）としては日本で一番古い。なぜ橋が跳ね上がるのか。それは肱川が物流の道としてもはやされた時代、木材などを積んだ大型の船が、橋の下を通れるようにと配慮したためだ。ただし赤橋が活躍したのは昭和40年頃まで。モーターゼーシヨンの進歩で大型船の航行はほとんどなくなり、可動橋としての役目を終えた。さらに昭和52年には下流に新長浜大橋が完成。赤橋の通行量は激減している。だが、長く産業や生活を支えたこの橋を、地元の人は今も心の拠り所としている。夏には、赤橋の袂でながはま赤橋夏まつりが開催される。また、週に1回、日曜の午後1時には点検を兼ねて、かつてのように稼働させている。どつしりと肱川に架かる橋は、住民たちの生活を優しく見守っているのだ。



自然林に覆われた寺は、1,200年の歴史を誇る名刹。晴れた日には、中国や九州地方の山並み、石鎚連峰まで一望することができる。冬の早朝、雲海の中から朝日が昇る様は圧巻だ

